

教育する衣食住：子ども生活文化論ノート

坂元，一光
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門：准教授

<https://doi.org/10.15017/7376510>

出版情報：国際教育文化研究. 8, pp.83-93, 2008-06-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



研究ノート

教育する衣食住

ー子ども生活文化論ノートー

坂元 一光

はじめに

本論では子どもを取り巻く衣食住の物質文化 (material culture) を対象にそれらが家族や社会のなかで「教育的」に編成される過程について取り上げる。これらの生活環境が教育家族に由来する近代的教育イデオロギーにもとづき子どもを中心に再構築される実態を見ていく。家族や子どもをめぐる観念についてモノ的資料から接近しようとする試みとしては、アリエスによる社会史的視点が知られている。アリエスは『〈子ども〉の誕生』のなかで歴史文書以外の図象、習俗、玩具、服飾、住居形態などの生活資料を活用し、そこから近代ヨーロッパにおける子どもや家族に関する歴史心性を抽出した (本田 2002 : 130)。アリエスに代表されるこのような通時 (社会史) 的視点に対し、本論ではより共時 (社会学・人類学) 的視点に立ったアプローチを試みようと思う。

本論の視点や問題意識にも密接にかかわる先駆け的研究としては、例えば家族を取り巻く「装置系」に注目した井上忠司の家庭論が上げられる。文化心理学の井上はこれまでの家族論が制度と間柄にのみ関心を向けてきたとしてその観念論的傾向を批判し、家族を実体化する装置の側面に注目する重要性を説いている。井上によれば家族あるいは家庭は家族集団を編成せしめているイデオロギーや制度的側面、家族関係を構成せしめている人間関係的な側面、そして家庭生活を可能ならしめている物質的な側面、の三側面からなっており、家族論もそれらを三位一体としてとらえるものでなければならないという (井上 1988 : 5-7)。その上でこれまで軽視されてきたモノを中心とする装置の側面に関心を向けていくことの重要性が指摘される。

一方、近年文化研究 (カルチュラル・スタディーズ) の立場からは、生活場面におけるモノと人の関係をひとつの「交渉過程」において捉える視点の重要性が指摘されている。祐成保志は身近な物質文化が「もうひとつの文化研究」の対象領域としてもっている豊かな広がりや可能性を再認識すべきことを主張する (祐成 2004)。祐成は「テクノロジーのドメスティケーション : domestication」 (シルバーストーン)、「モノのバイオグラフィー : biography」 (コピトフ)、「モノの商品化 : commoditization」 (アパデュライ)、「モノのアプロプリエーション : appropriation」 (ミラー) といった分析キーワードを紹介しながら、家庭生活の理解においてモノと人の間で展開される双方向的な交渉のプロセスに注目する新しい視点の重要性と可能性

を指摘している。

本論も基本的にこれらの研究の観点に即して、子どもや家族を取り巻く生活の装置系や物質文化に着目するものであり、そこに見出されるモノ環境の教育的あるいは子ども中心的な編成の実態を日常生活の「モノと人の交渉過程」を構成する一側面として浮かび上がらせようとする試みである。

1. 住育－教育的な住空間編成－

物質文化に言及する際、慣用的に「衣」「食」「住」の並びで表現されるが、ここではまず「住」から取り上げていくことにしたい。住まいはその家族に対し何よりもシェルターとしての空間を提供する入れ物（容器）であり、また子どもの成長や生活の基点となる場であるからだ。はじめに述べたように本論は家族における強い教育意識を身近な生活文化の教育的編成に関わる要因として想定している。以下ではこうした教育家族イデオロギーによって人びとの住まいや住まい方が子どもの教育あるいは勉学の向上を第一義の目的としてさまざまに構造化され方向付けられる過程を確認する。

1) 「教育家族」の誕生

教育家族あるいは教育家族としての家庭は、本論で取り上げる多様な子どものモノ環境を関連付ける共通のキー概念である。それは親や社会が子どもの衣食住を再構築する際の言説やイデオロギーを提供している。子どもの教育に対する強い関心をともなったこの新しい家族形態は、子どもの教育のみならずそれに関わるモノ環境の編成に対しても強力な影響力を発揮してきたと考えられる。

広い意味での教育家族の原型はアリエスが見出した子どもを中心とする近代家族のなかを求めることができる（アリエス 1980）。そのなかでアリエスは我われにとって馴染みの深かった子ども重視の生活のあり方や保護の対象としての子ども観が歴史的産物にすぎないことを示した。いわゆる日本の教育家族はこうした近代家族を基礎としてローカルな歴史社会的過程のなかで生み出された。日本の教育家族は 1910 年代の大正期、都市部の新中間層を中心にとりわけ熱心な教育意識をもった家族として誕生した（沢山 1990 : 127）。もっとも教育家族を支えた新中間層における子どもの教育を中心にすえた教育意識はそれほど平板なものではなく童心主義と学歴主義という相矛盾する二つの側面が並存する複雑な様相を呈していた。これに関してはさらに「子供は無垢＝無知であるがゆえに早期から厳しくしつけや道德教育をおこなって、ちゃんとした人格や生活規律を身につけさせようとする」（広田 1999 : 58）厳格主義の教育理念も付け加えられる。またこの新しい家族は父親が外で働き母親は家で家事・育児に専念するという明確な性別役割分業を前提にしており（沢山 18）、さらに家庭での教育は学校教育を補完するような役割や内容をもっていた（広田 1999 : 55-57）。こうした家庭教育と学校教育の同型化のあり方のなかにはすでに「学校化社会」（上野 2002 : 34-57）の萌芽も見出される。

2) 住空間に埋め込まれた教育

日本における住居空間の教育的編成は、ひとまず学習を目的とする「子ども部屋」と団欒の場としての「居間」に見出すことができるだろう。実際に機能するしないは別にして、日本の住居には子どものしつけや教育へと向かう社会や親たちの意思が埋め込まれており、それにそった空間編成を見出すことができる。教育家族を具現化し実体化させている場もやはり装置としての家庭であり住まいとしての住居なのだ。

居住空間の教育機能は、勉強部屋としての子ども部屋にのみ帰せられるものではない。教育的意図や目的的な空間編成とは異なる次元においても、住居の空間は子どもを教育し社会化してきた。子どもたちはそれぞれの家庭において「適切な」住まい方や住み分け方を実践することでジェンダーや年齢にもとづく社会規範を身につけてきたのである。いわば生活の中で空間秩序を実践することを通して暗黙のうちに社会化が促されてきたのだ。

韓国の伝統家屋における住まい方もそのひとつの例である。かつて韓国の伝統家屋では儒教思想にもとづく性と年齢による厳格な住み分けがおこなわれていた。生活をとおして「子どもは成長につれて部屋を変わり、徐々にではあるが確実に、男女の行動規範の違いを体で覚え、それぞれに〈文化化〉されていく」(丸山 1979 : 97)。居住空間には教育する意思とは別次元の日常実践を通じた教育機能があり、そこには性や年齢などの社会規範にもとづく空間編成が構造それ自体としてあらかじめ準備されていた。「部屋という空間は、人びとの行動を方向づけ、社会構造の再生産を促すハビトゥス (habitus) を体現している」(祐成 2007 : 68) のである。

3) 教育空間の自立化

日本家屋における子ども部屋の成立には諸説あるが、例えば内田清蔵によれば明治期に出版された建築書(『通俗家屋改良建築法』)の間取り図のなかにすでに「小児室」としてその存在が確認される。このほか内田は大正期、戦前昭和期の住宅や間取り図を紹介した文献のなかに、子ども部屋の豊富な事例を指摘している(内田 2006)。また子どもへの教育的まなざしを直接反映している例として、新中間層の母親による育児論のさがけ書となる『親心子心』(田中芳子著、同文館 1925)に紹介された子どもの「遊戯室」が指摘されている(沢山 1990 : 127)。

これら子ども部屋の提供意図あるいは使われ方に関しては、日本の場合、特に子どもの勉強のための空間として発展してきたといわれる。もちろん子どものプライバシー尊重や自立心の養成などの役割も期待されているが、建築学の立場から通文化的に子ども部屋の役割や親の養育態度、子ども自身の使い方を調査した研究によれば、日本の子ども部屋は勉強室という概念で捉えられているという(北浦 2004 : 91) また、民俗学の坪井洋文は日本の子ども部屋が勉強部屋として性格づけられる近年の時代的、社会的経緯について「子どもに個室を与えて部屋に孤立させていく傾向は、(中略)教育制度の改革とあわせて、工業社会をめざした体制の側の学歴社会化の価値観の形成と普及に負うところが大きい」(坪井 1987 : 185)と指摘している。

住居の中で専用の空間として独立化する子ども部屋には親や社会の子どもに対する特別なまなざし、すなわち学校教育的な価値観を中心とする配慮や期待が直接反映されている。親たちの教育する意思(とディベロッパーの思惑)にもとづいて居住空間が分割され、子どもにも配

分される。そこには教育家族イデオロギーによって編成される居住空間の姿が浮かび上がっているのだ。

2. 食育－国民運動による家庭教育の再編－

日本人の伝統的な住まいにおける座敷と茶の間はしつけや教育の空間でもあった。なかでもケの空間としての茶の間には日常的な食事や団欒の場としての機能が期待されており、またこの食事や団欒を通して家庭でのしつけや教育がおこなわれていた。

1) 家庭教育としての食育運動

人間の食の営みを通じたしつけや教育は今日「食育」の名称で知られている。食育の用法は古く明治期にさかのぼるといわれるが、平成 17 年の「食育基本法」の施行を契機に、国民運動をとって広く周知されるようになった。それにともない子ども部屋の成立を通して住空間が教育的に再編されたように、食というもうひとつの家庭生活の基本側面も教育的に再編されようとしている。すなわち子どもや家庭を中心に公的に設定された教育理念や指針にそって食生活の体系化がはかられ、教育家族の新たな側面を生み出されつつある。

人間の食行動はそれ自体生物学的で普遍的な営みであるとともに「特定地域の個人・集団の嗜好・感覚・生活習慣・自然環境のみならず、政治・経済・社会情勢全般とも結びつく、複合的な社会文化的現象でもある」（河合 2006：12）。近年の日本の食育運動もこの人間の複合的な食の営みを教育的に流用しようとするもので、必然的にその目標や内容も広範にわたる。それは人間形成から健康保持、あるいはグローバルな視点にもとづく食糧事情の理解、地域や伝統に根ざした食慣習の再評価や地域産品の活用法など、幅広い教育的目標のもとに家庭、学校、保育所、地域、民間団体などにおいてさまざまな取り組みが期待されている。

このうち子ども食育に関しては、特に家庭における取り組みが重視されており、平成 19 年食育推進有識者懇談会によりまとめられた「食育推進国民運動の重点事項」においては家庭での具体的目標が以下のように示されている（『平成 19 年版 食育白書』20 頁）。

〈家庭における取り組み（例）〉

1. 食に関する基礎の習得

- ・家庭等での食卓を囲む機会の増加・充実
- ・食前、食後の挨拶の習慣化
- ・正しいマナー・作法のよる食事

2. 食に関する基礎の理解

- ・「もったいない」活動の実践
- ・体験活動を通じた理解の増進
- ・家庭内での食事を通じた食文化の継承・豊かな味覚の形成

3. 食に関する知識と選択力の習得・健全な食生活の実践

- ・食の安全性に関する知識の増進

- ・食事バランスの向上
- ・生活リズムの向上

「食育推進国民運動の重点事項」（平成 19 年 6 月）より

2) 生活に埋め込まれた食育

食を通じて子どもの人間形成や関連知識の伝達をおこなうこと自体は、これまでも普段の生活のなかで無定形的なやり方でおこなわれてきた。それらは今日の食育運動にあるように自覚的、組織的、画一的におこなわれていたわけではなく、家庭におけるしつけや教育の一環として生活に埋め込まれた行為としてあった。これら慣習的食育は、大きく日常生活でのしつけや教育と伝統行事や祝いなど非日常的な機会におけるそれとに分けて考えられる。前者に関しては、例えば民俗学の立場から野口武徳らによる食事の立ち居振る舞いのしつけに関する指摘がある。この場合、食事は決まった席でおこない、正座をして食べ、食事の伸びや横になること、動き回ること、茶碗を箸でたたくこと、不浄な言葉を発すること、などの食事の立ち居振る舞いのしつけが子どもたちになされていた。また茶碗の米粒やその他の食べ物など粗末にしない、などのしつけもおこなわれたという（野口・白水 1973：35-36）。一方、文化心理学の井上忠司は茶の間や食卓など家庭生活を具体化する装置系の重要なはたらきに注目しつつ、食卓の変遷やその周囲で展開するしつけや教育について考察をおこなっている。井上は家庭におけるしつけの空間として茶の間と座敷を分け、前者を日常的な食事や家族全員の団欒のなかでしつけがなされる場、後者をハレの日や父親が子どもにじかに対面して改まったしつけがなされる場と見なす。いうまでもなく食を通じてのしつけは前者の茶の間が主であり、それは食卓を囲んでおこなわれる。さらに井上は「食卓の家庭史」（井上 1988：167-203）として、明治以来の家庭での食事の様子を老（婦）人たちからの細かな聞き取りによって紹介している。そこには彼女たちの記憶に残った幼少時の食事のしつけの具体的な様子が明らかにされており、彼女たちにとって、とりわけ幼い頃の共食の場は、確かに日常的な（ケの）しつけの場として存在していたことがよく分かる。

3) ハレの食育

井上はハレのしつけの場として座敷もあげている。座敷はあらたまったしつけの場であると同時にさまざまな家庭行事がおこなわれる空間でもある。建築様式や間取りの欧米化・現代化によって伝統的な座敷空間やその意味が希薄化するまでは、非日常的な機会における食のしつけが座敷を中心におこなわれていた。それは例えば年中行事や通過儀礼など客を招いての祝宴における礼儀作法のしつけなどが考えられる。こうしたいわばハレの食育に関しては、子どもの伝統行事における儀礼的な食慣行をハレの食育のひとつとして付け加えておきたい。それは筆者が注目してきた「儀礼的食育」に当たるものである。それは「儀礼的」の語に示されているように子どもの成長や教育に直接はたらきかけるのではなく、子どもの食の儀礼をとおして親たちに当該社会の伝統的な子ども観や産育目標を確認する行為である。それは例えば「食べ

始め」等の通過儀礼で用いられる食材や食品を通して参加者たちが子どもの存在様式や理想像に関わる文化モデル（ギアツ）を確認し共有するものであり、これもひろく民間の食育（慣習）のなかに位置づけることができるだろう（坂元 2006：44-45）。

4) 慣習のカリキュラム化

しつけや家庭教育のなかでおこなわれてきた慣習としての食育は、法的根拠と体系性、そして財源を与えられ、全国の家庭に向けた一大教育プログラムへと再編されつつある。その方法や知識は国民の誰でもが実行できるよう組織化、マニュアル化され、共通の理念や価値をめざした努力が期待されている。子どもの食は家庭の食卓を中心とする生活の文脈のなかでは正、調整することが求められ、かつての無定形的なしつけの形式に代わって、食材から食べ方、栄養学等に関する公式の知識体系が、さまざまな活動やテキスト（『家庭教育手帳』文部科学省）などを通じて家庭にもたらされている。

食育政策は家庭における社会化の一環としてあった食のしつけや知識伝達を本来の生活文脈からいったん掘り起こし、汎用性をもった自覚的で組織的な教育プログラムに編成したものである。さらに国民運動という社会全体を巻き込む方式によりふたたびこれを家庭の各生活文脈のなかに埋め戻そうとしている。このことは生活の一部である家庭の食の営みのなかに公式の教育理念と方法を導入することであり、私的な家庭生活のなかに公の教育理念や教育価値を反映させようとする施策ともいえよう。

3. 服育—衣服のしつけと教育—

これまで家庭教育や教育家族をキーワードに住空間や食生活について見てきた。しかし衣服のしつけや教育に関しては、家族や家庭教育の領域よりも学校での制服指導にその具体的で明確な形態を見出すことができるように思われる。もちろんこれまでも「身だしなみ」等の衣を介したしつけや教育が、家庭や日常生活のなかでおこなわれていたことはいうまでもない。しかし、どちらかといえば今日、衣服に関するしつけや教育は家庭よりも学校教育のなかでより明確な取り組みを見出しうる。具体的には学校での制服をめぐる生徒指導をはじめ近年の制服メーカーが主宰する「制服の着こなし」セミナー等がそれに当たる^①。ここでは学校や制服メーカーが取り組む生徒指導、教育的活動を大きく「服育」の概念でとらえておくことにする。

1) 衣服による同質化と差異化

人類の生活用具としての衣服にはいくつかの基本的機能が考えられる。1.身体のプロテクト、2.羞恥心の回避、3.ディスプレイ、4.道具的機能性、等であり、我われにとっての身近な衣服はこれらの複合的な構成物として捉えられる。これらの諸機能はここでの対象である学校制服にも備わっており、なかでもその教育的側面を考える上では、集団や個人のさまざまな関係性やアイデンティティ等の問題に関連するディスプレイの機能が重要である。

衣服の表出的あるいは記号としての役割に注目した場合、我われは同一性と差異化、あるいは固定性（持続）と変化という二つの極からなる参照軸を設定することができるだろう。いう

までもなく制服は同一性、固定性の極に、これに対し日常の私服は差異化と変化の極に近いところに位置づけられる。人類学の中谷はインドネシアの伝統染織のファッション化に関する論考のなかで、身体装飾における二つの対立する方向性、〈ファッション〉と〈反ファッション〉、について紹介している（中谷 2007 : 33）。このうち〈反ファッション〉は「過去との連続性や固定的な社会環境を体現する」装飾であり、集団の規模や目的はさまざまなでもある集団への帰属を表明し、また「われわれ意識」の確認をするような効果をもっている。一方の〈ファッション〉の方は「変化や進歩、時間の進行の象徴であり、社会移動と結びつく」。この二項対立的概念によれば学校の制服は同一性、固定性を特徴とする点で〈反ファッション〉に範疇化され、そこで重視されるのは個々人のアイデンティティの表出よりも集団のそれである。また制服が男女によって異なる場合、生徒個々人のアイデンティティよりも女子生徒や男子生徒としてジェンダー化された（二重の）集団的アイデンティティの表出が優先される。いうまでもなくこうした集団的な共通性の優先は、現場での生徒指導上の効率性と有効性のために積極的に流用されてきた。

2) 生徒指導としての服育

制服による上述の服育は集団的同一性を前提に生徒指導の一環として学校がおこなってきた。学校制服を着せる側にとって、それは主に 1.連帯感の醸成、2.管理的機能、3.経済性、などの目的や理由を持っている（木村 2007 : 108）。一方、スカート丈を短く改良したりカッターの胸をはだけたり、ズボンの腰ばきなどの着方、集団的統一性からの逸脱、セクシャリティや個性の過度の主張と見なされ、学校による指導や矯正の対象となってきた。このような着せる側の意図に対立し逸脱する制服着用がいわゆる「着崩し」と呼ばれる反・着こなしである。学校において制服の着こなし基準を定めこれに適応するように指導をおこなうことは、衣服を介したひとつの教育的指導であり、そこで用いられる統一的な制服は、教育的に織り上げられたひとつの衣の形態を示しているといえる。

3) 服飾文化論としての服育

制服による教育的指導は主に生徒指導の一環として学校が取り組んできた。しかし近年、セミナーのかたちで制服メーカーによる教育的な指導が活発化している。さきほどの大手制服メーカーは出張セミナーとして学校に出向き生徒たちへの制服指導を積極的におこなっている。そしてこれらのメーカーは学校がおこなう制服の着用指導とは異なり、より広い服飾の社会的、文化的観点を踏まえた指導をおこなっている。そこには制服を服飾文化全体のなかにまず位置づけた上で、身だしなみのマナーや着こなしの技術の延長上で制服について考えさせようと努力している。制服を服飾文化の広い視点のなかに位置づける個々のメーカーの試みは、学校におけるスカート丈等の基準にもとづく教育的指導とは異なる衣の文化論の要素を含んだ教育といえる。

服飾文化論にもとづいた教育的観点をさらに鮮明に打ち出したものとして、やはり制服メーカーによって提唱されている「服育」キャンペーンがあげられる^②。この服育キャンペーンは

繊維企業の制服部門が中心となり、先の「食育」の理念や方法をテコにするかたちで展開されている。「服育」の語は食育からとった造語であり、子どもの教育に関連づける視点は食育の基本理念を踏襲する内容に見える。2003年に大手繊維会社の服飾キャンペーンの一環として立ち上げられたこの「服育」運動は、衣服を通して環境を考え、衣服を通して健康、安全を考え、衣服を通して社会性を考えることを柱に学校や生徒への様々なサービスや商品開発をすすめるという内容であり、研究所の設置や協賛企業のネットワーク化、学校現場との連携などを押し進めながら普及拡大が目指されている。

この活動が興味深いのは学校教育や制服メーカー、あるいは制服という枠を越えて社会一般への広い波及が見られる点である。デザイナーや子ども服関連雑誌などがこの服育に関心を示し、それぞれの領域に戦略的に取り入れようとする様子が見られるのだ^③。すなわち、身だしなみのスキルだけではなく、審美眼やセンスを養成するための重要なツールとして衣服を位置づけようとしているのである。

4) 服育の外部化と家庭への還流

これまで見てきた衣服の教育的編成は子どもたちの周囲で重層のプロセスとして進行しているように思われる。まず学校における基準重視の制服指導があり、制服を供給するメーカーは服飾文化のなかに位置づけた教育活動をおこなっている。一方、一部のアパレル業界は服育の対象を学校制服に限定せず、一般の私服も含めた服飾センスを育てるより広範な服育を構想しつつある。今日の日本では衣服を介した子どもの教育は家庭の手を離れ、学校や企業に委譲され外部化される傾向が見られる。しかし、一方でアパレル業界がキャンペーンを通して家庭や社会にはたらきかける服育の流れには、外部化されてきた服育の家庭領域へ還流のきざしも見出せる。

おわりに

現代日本社会における衣食住を教育家族、子ども中心主義にもとづく教育的編成をモノとヒトとのひとつの交渉過程として概観した。本来、子どもにとって生活の基点、基盤である衣食住の領域には、しつかに代表されるような慣習的で定式化されない教育機能が埋め込まれていた。しかし、今日それらに対しては自覚的で組織化された再編が進みつつある。こうした流れを生み出すアクターは家庭をはじめ政府や学校、場合によっては衣食住の関連企業や業者などと多様であり、また各々の目的や思惑も子どもに対する素朴な愛情や期待から食料や健康、教育問題の解決、あるいはまた関連商品の販路拡大に至るまで複雑に錯綜している。かつてしつけや教育が生活の文脈に埋め込まれていたとき、衣食住はいわば物言わぬ教育装置としてはたらいっていた。しかし、今や教育家族や子ども中心主義が社会的に拡大し浸透する過程とともにそれらは声高に教育を語り始めるようになった。今日の衣食住は単なる生活技術ではなくひとつの教育装置として子どものグロースコンテクストの一部を構成しつつあるのだ。

〈注〉

- ① 「トンボ学生服」HPや「尾崎商事株式会社（カンコー学生服）」HPなど参照。
- ② 株式会社チクマキャンパス事業部による「服育」キャンペーンURL参照。
- ③ 朝日新聞記事「個性求める親心 キャッチ！一子どもファッション誌 多彩に刊行」（2006／06／13）では、子ども服のコーディネートや洗練された子ども服選びの指南をする子ども向けファッション誌の活況を紹介している。また服飾メーカー誌「m/f（エム・エフ）」（文末URL参照）では、「服育」が雑誌の編集方針のコンセプトとして提案されている。

〈参考文献〉

- アリエス 1980『〈子ども〉の誕生』杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房
- 広田照幸 1999『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書
- 本田和子 2002（2000）『子ども100年のエポック』フレーベル館
- 井上忠司 1988『「家庭」という風景－社会心理ノート－』NHKブックス
- 河合利光編 2006『食からの異文化理解』時潮社
- 木村涼子 2007「制服－身体をつつむ意味－」『モノと子どもの戦後史』（天野正子他著）吉川弘文館
- 北浦かほる 2004『世界の子ども部屋』井上書院
- 丸山孝一 1979「男性と女性」『人間の一生』（綾部恒雄編著）アカデミア出版会
- 内閣府 2008『平成19年版 食育白書』（本編）
- 中谷文美 2007「わたしの布は誰のもの？」『社会人類学年報』Vol.23、1-32
- 野口武徳・白水繁彦 1973『日本人のしつけ』ぎょうせい
- 坪井洋文 1987「住居の原感覚」『日本民俗文化体系』第10巻
- 坂元一光 2006『アジアの子どもと教育文化』九州大学出版会
- 沢山美果子 1990「教育家族の成立」、『〈教育〉－誕生と終焉』（産む・育てる・教える－匿名の教育史）1（編集委員会編、藤原書店）108-131頁
- 祐成保志 2004「モノのバイオグラフィー」『Design News』268:16-23頁
- 祐成保志 2007「住居－交渉過程としての住まい－」『文化の社会学』（佐藤健二・吉見俊哉編有斐閣）
- 内田清蔵 2006「住まいから見る近代日本における家族の変遷」『環』Vol.26/2006 夏、藤原書店、190-201頁
- 上野千鶴子 2002『サヨナラ学校化社会』太郎次郎社

〈HP・他〉

- 「株式会社チクマキャンパス事業部「服育」URL：<http://www.fukuiku.net/>
- 「トンボ学生服」URL：<http://www.tombow.gr.jp/school/>
- 「尾崎商事株式会社（カンコー学生服）」URL：<http://ozaki.jp/school/>

「m/f (エム・エフ)」 URL : <http://www.net.jp/fukuiku/>

朝日新聞記事「個性求める親心 キャッチ！ー子どもファッション誌 多彩に刊行」(2006/06/13)

Construction of Education through the Food, Clothing and Shelter of Children

Ikko SAKAMOTO

This paper clarifies processes of re-construction of children's living environments which originate in ideologies of child-centered education and school-centered education in present-day Japanese society. Addressing the concrete practices of food, clothing and shelter which surround and shape children, I clarify the actual ways in which everyday living situations are re-constructed in a child-centered way by education aligned with the value systems of school education, and I point at a living environment directed and shaped by an implicit educational consciousness among parents and society.

Food, clothing and shelter are fundamental tools and technologies in order for humans to live and adapt to a given environment. Additionally, instilled into these practices are not only their original functions (eating, wearing, residing), but also the informal educational functions (socialization) embedded in the various customs of disciplining children regarding food, clothing and shelter.

In today's Japan, however, national policies and corporate campaigns for "Food Education," "Clothing Education," and "making child-centered homes," are introducing more conscious, organized educational philosophies which employ practices of food, shelter and clothing, into daily life. In the past, discipline on food, shelter and clothing occurred mainly in the home, embedded in daily life. But now, in the process of child-centered and school-centered values infiltrating themselves into home life, the formerly voiceless educational devices of food, shelter and clothing have come to clamor education loudly.